



## 副鼻腔炎 (ぶくびくうえん)

### 顔面痛や嗅覚障害も

粘り気のある鼻水や鼻づまりなど不快な症状に悩まされる「副鼻腔炎」。風邪やインフルエンザなど感染症を機に発症することが多く、今の時期は注意が必要です。近年は治りにくいタイプも増えているといわれています  
(1月20日付日本経済新聞より抜粋)

#### ◆抗菌薬治療が基本

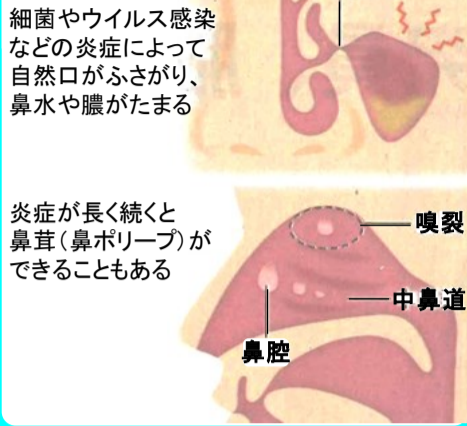
副鼻腔は鼻の内部(鼻腔)の周囲にある空洞です。左右に4対、全部で8つあり、自然口(しぜんこう)と呼ばれる細い通路で鼻腔とつながっています。

この副鼻腔の粘膜に炎症が起きると副鼻腔炎は、風邪やインフルエンザなどのウイルスや細菌感染、アレルギーなどをきっかけとして発症するケースが多いようです。

炎症によって粘膜が腫れたり、粘り気のある鼻水が出たりすると、自然口が狭くなってふさがったりして副鼻腔内に鼻水や膿がたまってしまふことがあります。すると、鼻水がのどに落ちる後鼻漏(こうびろう)、痰や咳、頭痛、眉間や頬などの顔面痛、嗅覚障害といった症状が起こればなりません。

発症から4週間以内は急性、12週間以上継続する場合は慢性とされます。炎症が長く続くと、粘膜の一部が腫れて垂れ下がる鼻茸(鼻ポリープ)ができることもあります。

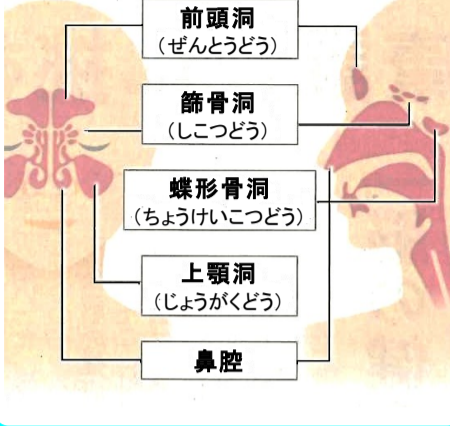
#### 副鼻腔炎の成り立ち



細菌やウイルス感染などの炎症によって自然口がふさがり、鼻水や膿がたまる

炎症が長く続くと鼻茸(鼻ポリープ)ができることもある

#### 副鼻腔の構造



#### 副鼻腔炎の主な種類と治療法

##### 急性 発症から4週間以内

- ・抗菌薬による治療
- ・症状によっては鎮痛薬や粘膜の炎症を抑えるステロイド点鼻薬などを併用

##### 慢性 発症から12週間以上

##### 従来型の非好酸球性副鼻腔炎では

- ・マクロライド少量長期療法
- ・改善が難しい場合や大きな鼻茸がある場合は手術

##### 従来型の非好酸球性副鼻腔炎では

- ・マクロライド少量長期療法
- ・改善が難しい場合や大きな鼻茸がある場合は手術

#### 副鼻腔炎の主な症状

- ▶ 粘り気のある鼻水、鼻づまり
- ▶ 鼻水がのどに落ちる後鼻漏(こうびろう)
- ▶ 咳や痰
- ▶ 頭痛、眉間や頬などの顔面痛
- ▶ においが分からなくなる嗅覚障害

#### ◆重度は内視鏡手術

慢性副鼻腔炎は大きく2つの種類に分けられます。1つはいわゆる蓄膿症と呼ばれる従来型。もう1つは、白血球の一種である好酸球が異常に増殖して炎症が起きる好酸球性副鼻腔炎です。「かつては従来型の非好酸球性副鼻腔炎が主流だったが、近年は好酸球性副鼻腔炎が増加している」(春名主任教授)

石戸谷耳鼻咽喉科(東京・世田谷)の石戸谷淳一院長は「好酸球性副鼻腔炎のほとんどは成人してから発症し、喘息を合併していることが多い」と話します。においを感知する部位(嗅裂)や空気の通り道(中鼻道など)には鼻茸が多く発生しやすく、早くから嗅覚障害が起これるのも好

獨協医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科の春名眞一主任教授は「風邪の場合には通常、鼻の症状は1週間程度で治る。それ以上長引いたり、逆に悪化してきたり、顔面の痛みが出たりする場合は、副鼻腔炎を起している可能性があるため耳鼻咽喉科を受診してほしい」と話します。

急性副鼻腔炎の場合は抗菌薬での治療が基本。症状によっては鎮痛剤や粘膜の炎症を抑える点鼻ステロイド薬などを併用することもあります。セルフケアとしては生理食塩水での鼻うがい(鼻洗浄)が鼻づまりや後鼻漏の不快感の緩和に有効です。

#### 熱海梅園



#### 訃報

弊社と長いお付き合いのある仲野克巳さんが2月10日にご逝去されました(享年82)。謹んでご冥福をお祈りいたします。故人はゴルフコンペ等で面見のよさから全員から慕われていました。早すぎのご逝去が残念でなりません。



## 2匹のクマ、どうからか「ヒゲマ」まで

### 体長や全長、頭胴長など複数の指標

全国でクマの人身被害が相次いでいます。「2匹のクマ」といわれますが、漫画などでよく出てくる立ち上がった状態の高さではないそうです。生き物の大きさの測り方を追いました。

(1月6日付日本経済新聞より抜粋) 生き物の大きさは体調や全長といった指標で表されますが、生き物によってそれらがどこからどこまでを指すのかは厳密には異なります。

国内最大の陸上動物といわれるクマ。北海道にはヒゲマ、本州と四国にツキノワグマがおり、ヒゲマの雄の成獣は大きなもので約2メートルになるといわれます。この2匹、どこからどこまでを指すのでしょうか。

ヒゲマ研究者らでつくる「ヒゲマの会」の事務局 長、佐藤喜和さんによると、一般的には4足歩行の状態、鼻先から尾の付け根までを直線で測る体長を指します。佐藤さんは「体長2匹のヒゲマでも、立ち上がったときは2.5倍程度になると説明します。

一方、京都大学野生動物研究センター(京都市)特定准教授の新生太さんによると、哺乳類の研究者がよく使う指標は全長、頭胴長(とうどうちよう)、尾長(びちよう)の3種類です。

全長は動物の体をおおむけにして背筋を伸ばし、鼻先から尾の先までを測ります。例えば、ネズミの場合、長い尾を伸ばした状態で測ります。頭胴長は鼻先から尾の付け根まで、尾長は尾の付け根から肛門から尾の先端までを指します。頭胴長と尾長を足すと全長になります。

北海道は報道発表などでヒゲマの大きさを示す際は体調を使うことが多く、尾は含みません。北海道ヒゲマ対策室主幹の武田忠義さんは「尾は短く、尾がなくても全長と大差がないため、分かりやすさと測りやすさを優先した」と説明します。クマ類は調査主体により北海道と異なる基準の体調を使うところもあるなど、一様ではありません。

もともと、大型の野生動物を生きたまま平面に寝かせておおむけで測るのは困難です。実際には横向きで計測メジャーや棒をあてるなどして測ることもあり、死体を測ることもあります。

キリンのようなヒヅメを持つ大型哺乳類では、前脚の先から肩の盛り上がりまでの高さを測ることが多いようです。へびは鼻先から肛門にあたる総排出口までの長さなど「動物によって指標を使い分ける」(新生太さん)そうです。

意外なのは鳥類。思わず「そこ？」と言いたくなります。

国立科学博物館(科博)で鳥類を研究する浜尾章二さんは「研究者にとって代表的な指標は翼長(よくちよう)と説明します。かなり分かりにくいのですが、翼長とは翼の肩のように見える翼角(よくかく)から

羽の先まで測ります。一般的なシジュウカラだと翼長は片側6.5〜7センチです。くちばしの先から尾の先までの全長で測ると、14.5センチほどになるのでずいぶんと違います。クモも計測値と実物のイメージの差が大きい。頭と胸、胴体の部分を合わせた体長が基本ですが、よく家で見かけるイエユウレイグモは体長0.7〜1センチに対し、脚の最長は5〜6センチもあります。体長を聞いて小さいと思っても、いざ実物を見るときょととするかもしれません。

「測り方のトレンドが変わってきた生き物もいる」と話すのは科博で昆虫に詳しい野村周平さんです。例えば蝶。かつては左右の羽を開いたときの横幅が一般的でしたが、現在は前後2組の羽のうち前側の付け根から先端までを測るのが主流に。これは「図鑑などに使う生態写真が普及し、羽が閉じた状態が注目されるようになった」(野村さん)ためです。

魚類は目的によって様々な指標があります。釣果を少しでも大きく見せたい釣り人が好むのは全長。先端から二股になった尾びれを寄せて一番遠いところまでを直線で測ります。釣り愛好家団体ジャパングームフィッシング協会(JGFA)の専務理事、東知憲さんは「計測メジャーを先端から魚の体のカーブに沿わせて、ひれの一番遠いところまでの『ふんわり全長』で測る人も多い」と話します。

JGFAでは先端から尾びれが二股になる分岐点までを直線で測る尾又長(びさちよう)が原則です。世界共通の計測メジャーで測ります。一方「研究者は壊れやすい『標準体長』を使う」(篠原さん)。上あご(鼻先の突起から尾びれの骨格の最後端までの長さです。全長25センチのサヨリなら尾又長は約24センチ、標準体長は約20センチと短くなります。

魚類は目的によって様々な指標があります。釣果を少しでも大きく見せたい釣り人が好むのは全長。先端から二股になった尾びれを寄せて一番遠いところまでを直線で測ります。釣り愛好家団体ジャパングームフィッシング協会(JGFA)の専務理事、東知憲さんは「計測メジャーを先端から魚の体のカーブに沿わせて、ひれの一番遠いところまでの『ふんわり全長』で測る人も多い」と話します。

JGFAでは先端から尾びれが二股になる分岐点までを直線で測る尾又長(びさちよう)が原則です。世界共通の計測メジャーで測ります。一方「研究者は壊れやすい『標準体長』を使う」(篠原さん)。上あご(鼻先の突起から尾びれの骨格の最後端までの長さです。全長25センチのサヨリなら尾又長は約24センチ、標準体長は約20センチと短くなります。

